法護には譯語の一致するものも多く、『出三藏記集』の記載と相俟つて師の翻譯と認めてよいのであろう。

『無量壽經』の翻譯が永初二年（四二一）たることに矛盾があることは、『出三藏記集』に示される『華嚴經』の翻譯と同時であること。又、谷大所藏の神瑞二年（四一五）の古寫經によつて問違つていたことは、今更いうまでもない。かように、永初二年翻譯說が否定されると、竺法護譯說が唱えられてきた。しかし『無量壽經』に用いられる譯語と、竺法護・覺賢二師の譯語とを比較研究するに、『無量壽經』が弟子名の敬稱に使用される尊者の譯語は覺賢譯の諸經に一致し、竺法護譯の諸經では賢者と譯される場合が非常に多い。又、『無量壽經』に說かれる佛の十號說は覺賢譯に完全に一致するが、竺法護譯とは全然相違するのである。かかる點から考えると、『無量壽經』はやはり神瑞二年以前に覺賢によつて翻譯せられたものと考えられよう。

所で、覺賢譯の諸經を精密に研究するに、『觀佛三昧海經』には古譯の譯語である釋迦文佛の語が用いられているから、此の經は最も初期の譯出ではなかろうかと思われる。從つて『無量壽經』の譯出はこの『觀佛三昧海經』の後、『摩訶僧祇律』の翻譯を道場寺において義熙十二年（四一六）に開始する以前で、それは恐らく『達摩多羅禪經』譯出の前後のように考えられる。卽ち覺賢が長安にきて（四〇六頃）から、羅什門下のために擯斥せられる（四一〇頃）までの數年間の期間中か、或は廬山において『達摩多羅禪經』等を譯出した頃に、この『無量壽經』を翻譯せるものと推考される。又、『高僧傳』（『敦』二・一四左）に、

「雲譯出新無量壽、晚出諸經、多雲所治定」

と記載される記事に從えば、寶雲は後に『無量壽經』を治定し修正したことが知られよう。而してこの記事によつて、神瑞寫經は寶雲の治定以前の經典であろうと推定される。

五部九卷の「宗祖御加點本」について

藤原幸章

高田專修寺に傳わる五部九卷の「宗祖御加點本」についてその問題點の二三をありのままに指摘し、併せてこの書がいかなる意味で「宗祖御加點本」といわれるかについて私見を述べたいとおもう。

本書は明らかに宗祖當時の版本の特色を具備した古版本九卷から成り、各卷の表紙には故辻博士が宗祖眞蹟と斷定せられた筆蹟で夫々の題號が墨書せられている。けれどもそこには宗祖御加點の事實を物語る奧書や識語は全く認められない。これ程の大部なものに何故に宗祖自身の識語がのせられていないのか、他の眞蹟諸本の常例からみて理解しにくいものがある。これ第一の問題點である。第二には本文加點は墨筆を主とし間々朱筆もみられるが、この中墨筆の筆致は他の眞蹟に比してその氣品風格共に劣ると認められ、また他に類を見ない程細筆且つ詳細に記されていることである。五部九卷中法事讚の初刊は寛喜二年（宗祖五八歲）、般舟讚のそれは貞永元年（六〇歲）であるから、少くとも本書の加點年時はそれ以後でなければならないが、六〇歲以後に及んで後、果してこれ程の細筆が運ばれえたで

あろうか。尤も少部分にみられる朱點や間々認められる誤點訂正の筆致は宗祖のそれを彷彿せしめるものがあるが、これについては後述する。第三には加點の送字の中「玉・云・上・下・メ」等、他の眞蹟には全くみられないか、或は使用例の乏しいものが全面的に用いられていること、第四には本書の加點讀法は僅かではあるが宗祖の深い體驗に基く獨自の加點と矛盾する如き讀法が認められることが指摘せられる。

然るにここに特に注目すべき事實がある。卽ち本書の加點は存覺師書寫の觀阿彌陀經集註（專修寺藏）に師が自ら附した加點と全面的に一致するという事實である（もとより上述第四に指摘した如き本書獨自の加點もそのまま踏襲せられている）。この事實こそ本書が既に存覺師の當時において宗祖御加點本として承認尊重せられていた事實を物語るものといつてよく、それゆえに存覺師は愼重に寫しとつた宗祖眞蹟集註（西本願寺藏）の白文の部分に附する加點を、同じく「宗祖御加點本」たる本書に據られたのであろう。ここにおいて更に上述した本書の朱筆加點、及び誤點訂正の筆致が眞蹟を思わしむる事實を顧るとき、本書については次の如くいえるとおもう。

恐らく本書には聖人以外の原加點者があつて――それは側近の門弟の一人であつたであろう――宗祖の懇篤な示敎を戴しつつ、自用のため全卷に細筆の加點を施し、これを以て宗祖の校閲を仰いだ、宗祖はその懇請に應じて全文を閲讀せられ、原加點の誤讀は一々これを訂正し、或る部分には朱筆を加え、そうして最後に同じく原加點者の懇請を容れて親しく各卷の題箋をのせられた、かくして成つたものが本書五部九卷の「宗祖御加點本」であろうと。しかしてこの場合宗祖の識見と矛盾する二三の加點については、本書が大部でありしかも細筆詳細を極めた原加點であつたがために、僅かながらも校閲漏れを招いた結果によるものではなかろうか。

大無量寿経と小乘涅槃経

西尾京雄

（本講は「親鸞敎のゴータマ佛敎での位態」と題して『中外日報』（三十五年十二月九、十、十三日）に掲載しました。）

淨土論考

幡谷明

淨土論の具名である「無量壽經優婆提舍願生偈」について、古來論註の題號釋等に依り、三經通申・別依大經という見方がなされて來たことは、周知の如くである。ここではその別依大經ということについて、經と論とが如何なる相應關係にあるかを、論の綱格をなす五念門と三種莊嚴の根據を大經の上に探し求めてゆくことによつて、明かにしてゆきたいと思う。

先ず五念門について窺うと、從來の諸說中で大經に關するものとしては、主として上卷の勝行段の文と下卷の阿難見佛の文とが擧げられるが、それらは必ずしも充分に納得のゆくものとは思われない。それよりも古くは本派の誓鎧師に依り、近くは金子先生に依つて指摘せられた嘆佛偈の文を注意すべきであろうと思う。